令和６年１月１３日（土）　陸奥新報【１面】

弘大サークルGGAP

東北の国立大で初　リンゴ園で取得

認証継続へ審査に意欲

地域農家への助言も視野に

GGAP認証書を手にする大坊さん

弘前大学の学生サークルＧＡＰ研究会（井村哲之将代表）が、同大所有のリンゴ園で農産物の国際認証規格「グローバルＧＡＰ」（ＧＧＡＰ）を取得した。弘前大ＧＡＰ相談所によると東北の国立大学では初の取得という。サークルは認証継続のため、今年の審査への挑戦、地域でＧＧＡＰ取得を目指す農家支援などにつなげていきたい考えだ。（西尾英）

グローバルＧＡＰは農業の食品安全、環境保全、労働環境に配慮した生産活動をするなど国際基準を満たした生産者・農場に与えられる“世界共通規格”。世界120カ国以上に普及しており、農産物を購入する企業にとっての信頼性担保ともなる。

井村代表らは、ゼロからＧＡＰ認証を目指してみようと昨年サークルを立ち上げ、農学生命科学部、人文社会科学部の学生メンバー計6人が、大学の一部圃場を借りて取り組んだ。圃場は約20㌃と狭小ではあるが、認証取得に向けては食品安全、トレーサビリティー、労働安全といった200超の項目が審査されるため、授業の合間などにできる人がリンゴの管理、書類審査の準備など手探りで取り組んだ。審査は昨年10月末に圃場で行われ、12月21日付で認証を取得した。

プロジェクトリーダーの農学生命科学部3年大坊和輝さん(21)は「うれしい。結果を待つまでは心臓バクバクで、本当に認証を取れるかどうか緊張した」と笑顔。今回、研究目標でまずは認証取得を目指したが、活動を通してＧＧＡＰの認証取得のための考え方や取り組み、気を付けるべき点など多くの学びがあったといい、「実際にＧＧＡＰを取った農家さんに話を聞いたことがあるが、従業員の安全、働きやすさのために取ったという話だった。輸出を目指す人だけではなく、ＧＧＡＰは労働環境や圃場、経営などの改善につながり、取得は多くのプラスになる。ＧＧＡＰ認証に興味を持つ人たちに、認証取得のための支援やアドバイスをする活動にもつなげていけたら」と今後を見据えた。

書類審査の様子＝昨年10月末、弘前大GAP研究会提供

この画像は，当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。